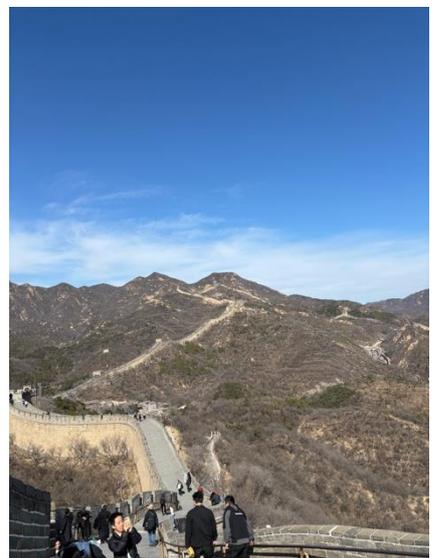


今回の北京研修では最初に石井先生から風景について考えるようご指摘があった、そのため研修中はそのことについて自分でさまざまに考えを巡らした。ここにはその一部を書き記したいと思う。

飛行機の上から見た華北平原は関東平野に勝るとも劣らず見渡す限り広く平でこれからの旅への高揚感が高まるものを感じた。北京で見えるものはどれもスケールがとても大きく、日本では決して見られないものばかりであった。2日目と4日目に訪れた北京大学と清華大学はどちらもキャンパスが大変広く、書院の学生さんが案内してくださった校内の池はどちらもとても立派で、校内であるにも関わらず観光地として庭園を楽しむことも十分にできた。3日目に訪れた頤和園と万里の長城もたくさんの驚きを与えてくれた。頤和園では清の漢民族への憧れから南部にある杭州の西湖を再現するために何もない平坦な土地に池を掘らせ、その彫った土を盛らせ丘のようにしたと聞いた時は大変驚いた。庭園自体は日本でも多く見られる回遊式庭園ではあるものの、日本のように植物を使って池を隠し、見えないことに美德とするのではなく、見るものを圧倒する雄大なパノラマで人々を魅了していることに文化の違いを感じた。また、万里の長城ではあまりもの壮観さに、これは外敵から国を守るためはもちろん、自国の権威を示すために作られているのではないかと考えてしまう。最終日に訪れた円明園ではアロー戦争において清の人々が西洋に憧れて作られた西洋風の建物が英仏連合軍に無惨にも破壊されている遺構を目の当たりにして戦争の惨さを改めて思い知ることができた。

そして、私たちの生活に比べて北京の風景は一見乱雑なように見える。路上に置かれている大量のシェアサイクル、その中には倒れているものもある。黄砂によるものかはわからないが誇りをかぶった大量の車。置く場所がないからといって、ほかの料理の上にそのまま移されてしまう料理たち。例を挙げようと思えばまだまだあるかもしれない。これらは私たちの生活では到底見ることでできない風景である。しかし、この風景の中に暮らしている人たちからしたらどうなのであろうか。もちろん中国の方たちは私たちに対して日本のほうがきれいでとても好きだと言ってくれる人はたくさんいる、それにも関わらずその方たちは進んでその風景の中の一部になることを受け入れている。人は生まれながらにしてなにかしらの風景の構成員となっている。それははじめから自ら望んだものではないのかもしれない、または様々な経験を経てその中の一員になることに納得している人も多いのかもしれない。そのことを考えると、我々が理解しがたいものであったとしても、誰かにとっては与えられた条件のもと効用を最大化する方法を常にとっていると非効率的なことをすべて取り除かれた経済学の世界を学んでいる自分としては考えてしまう。では、我々はどのようにその風景に相對すべきであろうか。否定することや、この人たちにとってはそうなのだと受け入れることは簡単である。しかし、そのように考えることは旅などを通じて、我々が存在している風景から飛び出すことに意味はあるのだろうか。



私はその人たちがどのような条件のもと、自らの効用を最大化していると考えている理由に興味を示す態度を表さなければいけないのではと考える。そのためには、一人で考察を巡らせることも大事ではあるが、その中にいる人々から話を聞くことは必要不可欠であると考えている。旅を通して視野を広げることが多々あるが、それは風景をただ観察したのみに過ぎず、実りあるものになっているか疑わしい。旅を通して新しい視点を持つには、現地の方との交流することなどを通じて、なぜそのような風景になっているのか理解することが旅において大事なことではないかと考える。

自分は以前中国の上海に長年住んでいたが、今回の北京研修を通じて中国に対して異なる視点を持ちより解像度が高まったように思える。また、中国におけるリベラルアーツ教育が東大の教養学部とどのように異なり、東大のリベラルアーツ教育の行く先について考えるき大変貴重な機会になった。自分は3年生からは経済学部に進むが、EAAを通じて今後とも教養とは何かを考え、より一層研鑽を積んでいきたいと思っている。